

伝統の継承を誓って

谷川彰英*

篠原昭雄教授が、1994年3月31日をもってご退官されることになりました。先生は1988年4月に本学にいらっしゃいましたので、丸6年間お世話になったことになります。私自身はその2年前に赴任していましたので、先生とはちょうど6年間ご一緒させていただきました。先生が赴任された翌年には梶哲夫、横山十四男先生をご退官でお送りすることになりましたが、今考えてみれば昨日のように思えてなりません。朝倉隆太郎先生、梶哲夫先生、横山十四男先生に続いて、篠原昭雄先生までお送りしなければならぬと考えると、断腸の思いすら致します。ただ、後に残される者の責任の重さをひしひしと感じざるを得ません。とりわけ、この筑波大学社会科教育学会にとりましては4年間にわたり会長の任に当たっていただいたこともあり、先生のご退官はまことに残念と言わなければなりません。

先生は1931年（昭和6年）山梨県中巨摩郡竜王村（現竜王町）にお生まれになり、東京教育大学理学部地学科地理学専攻卒業され、その後東京都立の北野高等学校、大泉高等学校、日比谷高等学校などの教鞭を取られる一方、NHK通信高等学校講座で「地理」を担当なさるなど、多方面にご活躍されました。

1975年（昭和50年）4月から1981年（61年）3月まで、文部省初等中等教育局の教科調査官として、中学校社会科、高等学校社会科地理及び政治・経済を担当されました。先生の全国的な視野の広さとネットワークはこの時期に形成されたものと言えましょう。いわば中等教育レベルでの社会科教育、とりわけ地理教育の指導者として活躍されたのであります。その後信州大学に教授として迎えられ、その2年後の1988年（昭和63年）、筑波大学教育学系の教授として本学に籍を移されました。

本学においては、社会科教育学分野の教授としての重責を担われると同時に、1990年（平成2年）4月より、本年3月まで筑波大学附属高等学校長を併任され、附属学校における生徒指導の面においても多大な貢献をされました。この4年間の附属学校長としてのお仕事は、先生にとっては時宜を得たものであったと思います。高等学校教育に長く携わられてきた経験を十分に生かされた上での研究の場でもあったと推察しております。

学会活動の面におきましても、先生は日本地理学会や日本地理教育学会等の会員・幹事として活躍され、今日まで地理教育界をリードされてきました。日本社会科教育学会では1992年（平成4年）4月から本年3月まで学会長としての重責を担われてきました。その他全国社会科教育学会の理事を努められるとともに、平成元年より本年3月まで4年間にわたり筑波大学社会科教育学会会長も努めていらっしゃいます。

本学会は、東京教育大学教育学部の社会科教育研究室の伝統を受け継ぎ、1979年（昭和54年）に発足した大学院修士課程教育研究科社会科教育コースの成立を契機にして結成されました。教育研究科は、東京高等師範学校に始まり、東京教育大学に引き継がれた長い伝統の下に、特に中

* 筑波大学 教育学系

等教育レベルの教員養成を目標に創設された大学院です。社会科教育コースはその多様な内容の故に、1年遅れて出発したコースであります。1993年度(平成5年)度の入学者はすでに15期を迎えました。今全国に卒業生が高等学校を中心にして、中学校、小学校等で活躍しています。とりわけ、この研究科から育った研究者も多く、その数は10名を超えています。

先生のご研究は、『地理教育の本質と展開』(1984年、明治図書)『新旧学習指導要領の対比と考察—中学校社会—』(1989年、明治図書)等の著作に見られるように、社会科教育の中でも特に中等の地理教育論に焦点を当てられ、多くの業績を積み重ねてきました。先に挙げた著書は言うまでもなく、町田貞氏と共編著となる『社会科地理教育講座』全三巻は、地理教育の全分野を網羅した企画として高い評価を得てまいりました。先生の学問はまた、地理教育に限定されるものではなく、広く社会科教育全般に及び、国際理解教育、消費者教育等の領域におきましても、貴重な成果を挙げられてきました。

篠原先生は、もともと高等学校での経験を豊かにお持ちであり、それを背景にして学生を指導されてきました。とりわけ、ご専門であられる地理教育においては、多くの俊秀を世に送られてきました。先生の指導はあくまでも優しい中に、学問的な厳しさを備えたものでありました。それは、全国各地から見えていた内地留学生にも同様でした。そのため、毎年先生を慕って各地から内地留学の先生が集まってきたのです。

個人的になりますが、私はこれまで地理教育の先生方に色々な意味でお世話になってきました。教育学畑の出身である私にとって、地理学出身の先生の発想は大変新鮮で、多くの刺激を与えていただきました。論文指導の際には、細かな表現まで目を通され、ラインマーカーでチェックされている姿が印象的でした。その緻密なご指導により、院生たちの論文執筆の能力は一段とアップしたものと確信しております。

正直に言って、現在「社会科」をめぐる状況には厳しいものがあります。ちょうど先生が筑波大学に移られた直後に、高等学校の「社会科」が「地理歴史科」と「公民科」に再編成され、社会科の教科構造が問われています。先生は其中で、「社会科」の実質的な発展に尽くされ、多くの貴重な発言をされてきました。私たち後進の者が今後の社会科教育を構築していかなければならないのですが、今後の指針を示すのは非常に難しいと言わなければなりません。そのような時には、また是非先生のご指導とご助言をいただかなくてはなりません。

そのような状況の中で筑波大学社会科教育学会が果たす役割は大きいと考えます。篠原先生はそのための布石を残していかれたと考えています。私たちは、その伝統を受け継いで最大限の努力をしたいと思えます。

このたび篠原昭雄先生退官記念会編『現代社会科教育論—21世紀を展望して—』(帝国書院)を刊行することになりました。先生の薫陶を受けた私どもを中心に、関係者が全力を挙げて書いたものです。是非これもご覧いただき、今後の研究に役立てていただきたく思います。

篠原先生は万年青年のような若々しさ備えていらっしゃいます。その若さと学問に対する厳しさと学生に注がれる優しい笑顔をお忘れなく、いつまでもご活躍下さいますよう、心から祈念致します。

この6年間賜りましたご厚情に対し、会員一同から感謝申し上げますとともに、今後のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。(1993年12月10日)